

「今求められている『共同体』と私たち」

と き 2024 年 10 月 5 日（土曜日）

ところ 飯田市勤労者福祉センター

目 次 1, 講演「今求められている『共同体』と私たち」

哲学者 内山 節……………1

2, 質疑 1～7……………21

主催 アヲハト会

1, はじめに

ご紹介いただきました内山です。

今、ちょっと私たちが生きている世界の様子が大変悪くなってきて、中東はこれからどうなるのかとか、ロシアはどうするのか、中国はどうするのか。第一アメリカはこのまま保つことができるかなどそんなことがいっぱいあります。それから東京でも同じなんですけども人々が結構貧しくなっている。貧しくって、内容じゃなくて本当にお金の問題です。だから節約する方向に皆さんがきて、そうなってくるとお店が大変っていうことも起きているのです。今、本当にそんな感じです。

学生さんなんか比較的しっかり家から仕送りをもらっている学生さんと、それは無理という学生さんと2つに分かれてきています。無理な方……今の学生さんのうち奨学金を受けている人が半分なんです。だけど日本の奨学金制度って借金ですから。しかも、ちゃんと利息も取られるのです。だから奨学金をもらって卒業しちゃうと、4年間で文化系でも2～300万は借金を背負って卒業するという感じになってきます。

奨学金をもらってアルバイトをいくつもやって、やっと大学に来ている、そういう学生さんもたくさんいます。ですから最近の傾向っていうのはゼミ合宿とかができなくなっています。というのは夏休みにゼミ合宿したいから、じゃあ会費を一人1万円とか2万円とかでやっても、「その出費ちょっと無理」っていう学生さんが結構いて、そうすると無理な人を排除して合宿をするわけにもいかなくなります。僕なんかはそういう話を聞くんで、それは先生の方の態度が悪い、出せない人の「会費は全部自分が払うから、来ないか」って言えば簡単じゃないかと言うと、先生に出してもらった人と自分のお金で来た人の間でちょっと疎外関係みたいのができてくる。先生が全部出せばいいじゃないか、今度の合宿は全部無料にして「全部、私が持つ」と言えば話は簡単じゃないかというのですけれど、先生の方もあまり余裕がなくて、そこまでできる人が少ないという感じだったりしています。

今はどんどんそんな感じになってきていて、また卒業しても非正規雇用になったりするケ

ースも多いので、そうすると奨学金を返していくのも大変ということになっちゃいます。これは将来的にどういう社会になってしまうんだろうか。そういう面でも、私たちの生きている世界は体調不良になっている感じがします。

① 人間は地球上の最弱動物として生まれた。

そういう時代だけに原点から考え直す。そういうことをやっていかないと、ちょっとどこかをいじったぐらいでは片が付きそうにない。そういう時代でもあるという感じです。

今日の共同体というテーマですと、そもそも人間ってというのは地球上に極めて弱い生き物として生まれることになっていて(登場した頃の人間は、もっと小さかったようですけど)、人間はどの能力もあまりない。例えば走ることができるけれども、それは狼や狐たちと比べれば走る能力もはるかに低い。それから頑張れば木に登ることはできるけど、猿と比べればはるかに能力はない。もちろん空を飛ぶなんてできないし、やっとな泳ぐことはできるけど魚のようなわけにはいかない。つまり気がついてみると人間って非常に弱い生き物として、この地球上に登場してきています。

② 運動能力の低さ、ウイルス・細菌に対する弱さ。

しかも人間にとって非常に致命的なのは、ウイルスとか細菌に極めて弱いってことです。ですから普通の動物になると多少腐った肉くらい食べても、ちゃんと自分の栄養にしてしまう生き物がたくさんいます。けれども人間は腐った肉なんか食べたら、それは棺桶を準備するしかないみたいなことになりかねない。そういう意味で弱い生き物だった人間たちがどうやって生き延びるか……その時に多分、人間が考えたことは二つでした。

一つは道具を作ること。つまり木に登って実を取るにしても猿のような動きが出来ませんから棒を使ってたたき落とす。その方がいい。それからウイルスや細菌に弱いから、食べるものは加熱して火を使って料理をする。だから道具を使ったり火を使ったり、料理したりというのは人間が優れているから開発したものではなくて、むしろ人間が劣っているから、その劣っている部分を補おうとして作り上げた、そう考えた方がいいんだろうって気がします。

③ 弱さを補う方補としての道具と共同体。

さらに言うと、一人ひとりの力が弱いから共同で何かに当たるのです。だから木の実を取るのにも、一人で木を揺すってもたいしたことはありません。けれど、みんなで揺すれば木の実を落とすことができる。それから魚を取ろうとしても、一人で棒を持って追っかけ回しても、取れたとしても知れたものです。けれども皆で追い込んだりする。あるいは動物を採りたくても一人ではだめです。ですから共同することによって自分たちの弱さを補う。

だから人間の出発点として、むしろ人間が優れた生き物だという発想はやめにして、人間は非常にダメな生き物だった。しかし、そのダメにも希望があるゆえに道具を作ったり料理をしたり、あるいは共同でことに当たったりするようになって、それがいつの間にか文明を産んでいったのです。

これが、あたかも人間がこの生き物の世界で頂点にいるかのような錯覚をもたらした。でも、そのように考えた方がいいという気がします。だから人間は弱い生き物であるって言う

原点に、もう一度戻っていくという気がしています。

実際もそうで、僕は先ほど紹介されたように群馬県の上野村にも家があるんです。去年の秋に庭にいました。庭からそのまま山につながっていくという地形なんで、山の一番下あたりというか、庭の外れでガサガサと音がするんです。前の日にその辺りを狸が歩いていたんで、僕はすっかり狸だろうと思って「そこにいるのは狸か、狸だったら出てこい」って言って、そうしたらその動物は顔を上げたんだけど、狸にしてはでかいのでよく見たら顔が真っ黒じゃないか。おかしくって僕の方から「お前、顔が真っ黒だな」って言ったら、向こうがそのまま降りては来ないのです。こういうやつを相手にしない方が無難だって、山の奥の方に帰って行ったのです。

何もないんですけど、うちの村にも熊がたくさんいるので珍しい話でもない。ただ村の人たちの考え方は、そもそもこの村は動物たちの世界だから、そこに人間が端っこに住まわしてもらっている。そういう感じです。だから動物たちがこの村の王様で、我々は知らない人間でございます。そういう感じなので被害もないんです。ですからニュースになるような話はないのです。

何年前にもちょっと先で日本蜜蜂の蜂蜜を作っている小屋があるので、家の庭を熊が毎日歩いて蜂をとりにつく。帰りに熊が一つずつ抱えて山に帰って毎日一つずつ食べ、すごいなと思います。けれど、その時にも集落の人が集まって「どうしよう」と話しますが、皆さん熊の習性を知っているんで、ここに出ればまず問題ないし、今は子熊がいる時期ではない。大人の熊が取りに来るだけなので（子どもがいる時にはよっぽど注意しないと、子供に手を出すんじゃないかっていうんで守ろうとしてきます）、このまま黙っていようっていう結論になっていく。熊が毎日歩いているって騒いじゃうと、結局は有害駆除みたいな感じになって、場合によったら熊を殺す話になってきちゃう。被害もないし、元々ここは熊の世界で、そこに我々が住んでんだから静かにしようっていうことで終わってしまったんです。

そんな感じにしているんで、別に被害もなくって……という感じです。けれど、それで済まなくなるかもしれない。それはちょっと分からないですけどね。熊の方も習性が変わってきているので、今までと同じ感覚で向こうもいるかどうかかわかんないことがあります。それでこれからいけるかどうかはわかりませんが、今までのところはそんな感じです。

そういうことも含めまして、我々がこの世界を取り仕切るんじゃなくて、自然がこの世界を取り仕切っている。そしてその自然が取り仕切っている世界に我々は住まわしてもらっている。それぐらいの感覚で見えないと、今までのように人間が頂点に立って威張っているやり方を取っていくと、いろんな形でわれわれは多分報復を受ける。そういう時が来ているんだろうっていう気がします。

先ほど言ったように、人間たちは弱い生き物であるがゆえに、共同体のようなものを作って助け合って生きてきた。だから共同体を否定してしまうのは人間の原点を否定することになっていく。ただ近代っていう時代では、人間がいろんな文明を作って人間が強いと錯覚をした時代でもありました。そのために人間がこの世界の王様になって、全てを支配するみた

いな、そういうことが可能であるような錯覚に陥った時代。そういうことだと思うんです。

2、今日の状況と近代的システムの瓦解。

① 人間が作りあげたものの限界。

その結果として今は自然もまた、人間界に対していろんな報復をしはじめる気がするのです。それが世界中で時に狂気になったりするんです。ですから今の時代って、実はその人間たちが作り上げてきたいろんなものが限界に来て、逆にいろんな報復を受けている。そういう時代になっていると思ってもいいぐらいの気がします。

例えばロシアがウクライナに侵略しています。ところが世界的に見てゆくと「ロシアを非難する決議案に賛成しない」と言った国が意外に多いんです。それはアフリカや南米とかに結構多いんです。けれど、どう見たってロシアがやっていることは擁護し難いようなことやっているわけです。だけど、その非難決議になぜ同意しないって言いますと、かつての植民地にされた側から見ていくと、欧米っていうのは最も信用できない国になっているのです。

例えば昔、僕のところにいた大学院の学生さんでカリブ海の小さい国の研究をやっていました。その人が、その小さい国をこれからどういうふうに作っていったらいいか、そういう問題意識を持った研究者なんです。こういう研究をするときは、普通は、私たちは今の社会が非常にマズイことになっているという気持ちを持つとその前の社会がどんな社会だったのか、それを見ようとするのです。そのことによって、そこにヒントはないかを考えるのです。

② 江戸の時代から学ぶこととは。

今の日本で言えば、明治以降にこんなふうやってきたから、まずいことになってきたんじゃないかという気持ちを持つと、やっぱり振り返るのはきっと江戸時代。でも江戸時代にそっくり戻ることにはできないけれど、江戸時代の社会の仕組みとか、そういったものから、なにかヒントになることはないか……そういう発想でものを考えるわけです。

実は『江戸の自治制』という面白い本があります。これを書いたのは後藤新平という東京市長をやったりした政治家なんですけど（彼が書いたんじゃなくてブレインが書いて、自分の名前で発表したのが本当らしいんですけども）、その中で彼は江戸の制度を非常にほめている。江戸の役人の数というのは圧倒的に少なくて、今ではこれぼっちの役人で社会は治められない。なぜ江戸では出来たのかというと、ほとんどのことは自治組織に任されていた。だから町の中ではいろんな自治組織があって、それが解決していく。農村に行けば農村自治があって、そこに会議がある。そもそも役人が介入する余地が極めて少ない社会を作っていたからです。だから、その本の題名も『江戸の自治制』っていう本なんです。

あと彼がこれは面白い組織だってほめていたのは、江戸の時代の役所には同じ役所が二つずつある。例えば 江戸の町奉行所は北町奉行所と南町奉行所とがあるのです。そして、この二つは同じ警察みたいなものです（今の検察も兼ね、裁判所も兼ねている）。その組織が同じものがそっくり二つある。そして月番で交代するわけだから、今日は北町奉行所だった

ら来月は南町奉行所が行うという、それをやったものだから不正が全くできない。つまり来月は別のところに移っちゃいます。これは一見すると二重組織だから無駄になっているように見えても、実はその役所の不正を防止したり、効率を良くする上で極めてよくできた仕組みだと新平はほめています。

例えばそういうので、もう一度その奉行所を復活させるわけではないけれど、何か、そういう仕組みの中に、ヒントになるものがないかっていうのは、もしかすると考えてもいいのかもしれない。だから私たちはちょっとまずいなと思うと、まずくなる前の時代を見て、そこで何かヒントがなかったか考えるのです。

本来でいくと保守系の勢力っていうのは、そういう発想をしなきゃいけないんだけど、日本の保守っていうのはそこまで行かなくて（明治以降の保守ですから）、なにか今もそうですけど夫婦別姓を認めたら日本の家制度が壊れるとか、そう思っているらしいんです。けれど日本の家制度なんて明治になってからできたものなんで、僕なんか保守だったら夫婦別姓なんて言わないで苗字の廃止くらい……江戸時代まではだいたい苗字なんかなかったんだから（あったんだけど本当は使ってなかった）。むしろ苗字に当たるものは、それぞれが勝手に作った屋号の方なんです。だから屋号でもみんな作りたい人は勝手に作っていた。それで日本の伝統に戻るって言うのなら、苗字を廃止してしまえば、夫婦別姓も同性もないんです。やっぱりそれぐらいの発想を立ててもいいだろうという気がするんです。けれど明治に作った家制度にこだわる。そういうことだから、本当に日本の保守っていうのは保守でもない保守って言いますか……そんな気がしてくるんです。ただの軍国主義者になってしまう気がしてくるのです。

③ この構造に対する途上国の報復がはじまったとき。

話を戻します。そのように物事を考えていくと、そのカリブ海の島国の研究をする人だったら、昔のその島の生活とか島の社会とか、それがどんなふうだったのかっていうのを探れないかと思うのですが、全く不可能なのです。なぜかというとなスペインの植民地になって400年、その400年の間に全てが破壊し尽くされている。だからスペインの植民地になる前にどういう島の文化があったのかとか、人々はどんな暮らし方をしたんだとか、あるいはどんな繋がりや町を作っていたのかとか、そういうものが全くわからない。

さらに言ってしまうと、元の人たちがどんな言葉を使っていたのかもわからない。それで目の前にあるのは絶対的な貧困だけ、ギャングが横行して社会を管理しているみたいな、そういう社会のありよう。だから子供達はほとんど学校に行っていないし、学校に行く余裕もない。だから小学生ぐらいになったら路上に出て靴磨きをやったり、あるいは車を停めてお金をせびったりするとか、そうやって家計を助けることになっています。だからどこを手がかりにして、この社会をもう一度良くしたらいいのかというのは全くわからない。そういう社会をどうしたらいいかって、急に僕に言われても、私はそこに行ったこともないし「困るんです」ということなんです。

けれど実は、それが旧植民地になった国の大半の状況なのです。つまりいいように社会は

破壊され、そこにあった富は全部持っていかれています。そして現在になってみれば、本当に絶対的な貧困とギャング化した政府があり、ギャングで成り立つ政府があるだけなのです。そういうどうにもならない状況で、そこの中を何とかしようという政府が出てきたりもするんだけど、その人たちの恨みの先っていうのは、やっぱり欧米の方に向かうわけです。ここまで徹底的に全てを破壊し尽くした連中が、また自分たちは正義の味方みたいな顔して振るまっていると、その連中なんかに同意できるかっていう、そういう感じですね。

それで幸か不幸かロシアもそこまで力がなかったのも、南米とかアフリカには出てきてないわけです。だから、その人たちの気持ちからするとロシアは何も悪いことやってない、そうだけど欧米は何をやったのだという。そういう気持ちもあって、それがロシア非難決議に同調しない。これも一種の報復と言っていいんですけど、そういう国際的な報復が始まっているという感じです。やはりこれは 欧米側が責任を取るべき問題に責任を取ってこなかったってことです。

④ 先進国における格差社会の深化と個人の破綻。

例えば 18 世紀の終わりから、国によっては 19 世紀に産業革命が始まりました。その時に産業革命を始めるとたくさん必要になったものの一つに木炭がありました。当時、例えば鉄を作るにしても、石炭っていうのは鉄を作る燃料に使えなかったのです。なぜか、不純物が多いので良い鉄を作ることができないのです。だから石炭を使って製鉄ができるようになったのは、コークスが開発されてからです。コークスになると始めに蒸し焼きにしますから、そのことによって不純物が落ちる。それを使って製鉄するから石炭製鉄が出来るようになったのです。

その前は どうやって製鉄したかという、木炭製鉄ですね。炭を使って製鉄するのが基本だった。そうするといろんな形で木炭が必要になってくるので、ヨーロッパでは産業革命がおきてくると国中の山が禿山化していくのです。それは全部炭にしちゃった。簡単に言うとそういうことなのです。フランスでは、その頃には山に木がなくなって、それは結果として大洪水時代を生むことになるんです。それから一種の森林保護みたいな政策が始まることになる。けれど自国は森林保護を始めたんだけど、その結果、何をやったかという、北アフリカにあった森林の木を全て切っちゃってしまって木炭にしちゃったわけです。

フランスの植民地に北アフリカのアルジェリアがあります。もともとサハラ砂漠というのは、もっと内陸だったのです。サハラ砂漠があつて森林地帯があつて地中海がある。その森林地帯の木を全部切っちゃったものだから、サハラ砂漠が海岸近くまで来た。それに雨が少ない地域ですから、未だに回復できないのが現状です。だから、あの地中海沿岸にあった森林地帯、その復元をする義務はヨーロッパにあると思うし、そういうことをきちっと責任を果たしていないという気がするんです。

そんなことをやる気はないまま、今が来ている。片方では二酸化炭素問題も絡めながら、一種の環境保全のようなことにヨーロッパ諸国は力を入れている。だけど、アフリカから見れば、「うちの木を切ったのだから考えてくださいよ」という話なわけです。かつ、それが

自分たちが正義のような顔をして好き勝手にやっている。本当に世界にはそういうようなトゲトゲしい報復が始まってきました。そういう時代を残念ながら迎えてしまったっていうことでもあるのです。

3、近代的個人の成立と国民国家、市民社会、資本主義。

① 個人を基調にした政治、社会、経済システム。

そういう中で、もう一度共同体の話に戻していきます。

近代っていう時代が始まってきますと、近代は共同体の時代ではなく個人の時代に移行した。近代を作った仕組みは国民国家、市民社会、資本主義の3つの仕組みが相互的な連関性を持ちながら、近代社会の仕組みを作ったと言ってもよいのです。国民国家っていうのは国民のための国家ではなくて、人々を国民という個人に分解して、その個人を国家が一元に管理する仕組みなのです。そして、この仕組みを必要としたのは戦争の都合だったわけです。

ヨーロッパは中世にはしょっちゅう隣国との戦争やっていました。ところが戦争に勝つためには国民が一丸となって戦争に向かわないと、だんだん勝てなくなってきました。それまでは王様とその家来たち(日本で言えば武士たち)の戦争っていう感じが強かったんですが、近代に近づいてくると、一つは兵器が近代化されてきて兵器というのは使い捨てになってくる。例えば、日本で言うと槍や刀で戦争をやっているんだったら(時にはその刀が折れたりするとかあるでしょうけど)、何遍でも使える武器なわけです。ところが鉄砲の時代になってくると、鉄砲は何回も使えるかもしれませんが弾を打ったとたん次が来る。そうすると絶えず武器を補充しなければいけない。大砲も同じことなので(今のウクライナの戦争でもそうですけど)、今の戦争はもっと高度化しているからミサイルとかロケット弾とか打ち合うわけです。あれは全部使い捨てになるわけです。いっぺん撃ったら再利用できないのです。

ですから武器が高度化していく歴史っていうのは、武器が使い捨てになってゆく歴史っていうことでもあるのです。だから戦争に勝つためには、その武器を絶えず補充していく能力が必要になってくる。そうすると戦地で戦っている兵隊だけではなくちやうわけです。後ろにいる人たちが頑張って大砲の玉を作ったりしていかなきゃいけない。それから、それを絶えず戦地に輸送する。そういう仕事が必要になってくる。その結果として、兵隊さんの何倍もの人たちがその背後で活躍できる仕組みにしなければいけないのです。そうすると食料も増産が必要になってきて、そのために食料を作らなければならない人たちが大量に発生するわけです。そういう人たちの総力によって戦争の勝つ、負けるというのは決まっていくという、そういう時代になっていったのです。

② 近代的個人を国家、社会、経済の道具として使用するシステム。

そのために、それまで日本で言えば何とか村の太郎兵衛さんとか言う人たち、あるいはせいぜい津軽のなんとかさん。そういうような人たちに日本国民として、その人たちが率先して国のために頑張る。近代は国民をそういうような人にしていかなければいけない。だから

何とか村の太郎兵衛さんで、俺は畑を耕して一生暮らすからいいんだっていう、そういう人間ではいけないということなんです。ですからそういうことを切り替え、作ったのが国民国家なのです。だから全ての人たちを一個人にして、その個人は国民という個人にする。その国民は国家が一元管理していきますという、そういう仕組みです。ですから今のマイナンバー制度みたいなものなので、全員がナンバーいくつに過ぎない。だけど、その仕組みは国家が一元管理をしている。その管理システムがしょっちゅうおかしくなるものだから、ますます我々としても「安心してこんなもん使って良いのか」という気分になります。

だから、今って本当に気が付かないいろいろなことがあります。例えば、ついこの間も（僕も高齢者になってきたので）、役場が優先的にワクチン接種券を送ってくれました。新しいコロナワクチンの接種券とインフルエンザの接種券を両方送ってきたのです。昔コロナワクチンの接種券が来た時に放っておいたのですが、その後ハガキで早く予約してくださいが来た。またほっといたので、この人はもしかするとコロナとかワクチンとか意味がわからない人じゃないかと役場の方は心配されたらしくて、その後手紙がきまして、すごく大きい字でコロナのことワクチンのことで、わからないことがあったら何でもここに電話してねって書いてありました。親切だなと思いました（これは東京の方の役場です）。

上野村ではそのようなことはなくて、あいつ生きていって直ぐ分かるのです。けれど東京は人数が多いので、大変親切に大きな文字で書いてある手紙をくれました。今回もまた新しいのが来たのですけれど、僕は別にコロナワクチンは原理主義的に受けるべきではないとか言っている人間ではないんです。ただ、それぞれ自分で判断してくださいっていう感じで、僕の話になると、僕は一回もやっていませんという感じです。

前から思っていたんですけど、僕の家は病院に全然行かないんです。大学に就職するはめに陥った時に、身体検査や健康診断をしなきゃいけない。要するに入社手続きみたいなものです。そこで大学の医務室に行って診断してもらったら、散々先生に怒られちゃいました。「最後に精密検査したのはいつですか」っていったんで、じ〜っと思い出して、確か高校の1、2年の頃「体調が悪くってやったような気がするんだけど」。「それからいっぺんもやっていないのですか」と言うので、「やってないですよ」って言ったら、それがいかに悪いことかということで叱られました。そこにある簡単な血液検査とかありましたが、どれも全く異常がない、検査結果には異常がないのです。でも検査しないのはいけないというのですね。でも、「このデータ見てください」「こんな、手遅れのようなデータになっているでしょ」「検査しないからこういうことになるんです」。これから、ちゃんとやってくださいとか言うんだったら少しは反省するかもしれないんですけど、データは何の異常もないけれど、検査をしないことが悪いことだけです。その説教を30分されました。その後、僕はタバコを吸うんで、タバコを吸うのはいかに悪いかって説教30分されまして、それで、もうこれはたまらんなと思っていました。

そうしたら、もういっぺん健康診断する必要性が出ちゃったんですね。大学の研究科を変わって、また新規入社みたいな扱いで書類が必要になりました。たまらないんで、知り合い

のお医者さんがいるので（そのお医者さんには見てもらったことはないんですけど）、前からの付き合いで、考え方が非常に僕と共感するものがある。そのお医者さんに電話して「大学の検査がたまらないんで、そっちでやってくれるか」って言ったら簡単にやってくれる。そしたら「それはうちで検査をするということですか、それとも検査をしたことにして書類だけ偽造してくれということですか」って言うのです。書類だけ偽造したのがばれちゃったら、先生もちょっと問題になるから「一応、形だけは検査してください」っていうことで、「分かりました」となりました。

そんなことをやっていて思うのは、病院に行かないと病気にならないのですね。なぜかって病名がつかないからです。病気っていうのは病名がつくから病気なんですね。ただし、もちろん一年の間には、今日はちょっと体がだるいかなと言う日は必ずある。ひょっとしたら風邪引いたかなとか、そういう時もあるわけです。けれど面白いことに病院に行かないと体調不良でしかない。病気にはならないんです。

僕は高校の途中ぐらいから、一度も病気になったことがないのです。コロナもこんな感じで乗り切っていこうかと思ってきたんです。けれど僕の周りにだってワクチンを一生懸命やっている人たちがいます。それで、あんまり心配しちゃった人達の中には認知症がひどくなっちゃった人も結構いて（何人も僕の知り合いでもいて）、その前から認知症ぎみだったんだけど、家から出られなくなって悪化しちゃった。そういう人もいて、ウイルスっていうものの持っている特性から言っても、ウイルスっていうのは、どうしたって毒性を弱めながら生き延びる方法で生きるものですから、その様子を見ながらやっていけばいいんだろうっていう気がします。

だけど国の推奨していく理由っていうのは、それが広がって経済活動に支障が出ることを嫌がっているんで、確かにコロナでそこら中の会社で休む人が出てくると経済に支障が出てくる。それを嫌がる。だから予防しましょう、予防しましょうっていうことになっているので、別に僕らがそれに乗せられる必要もない気がするのです。

ただファイザーっていうアメリカの会社はワクチンで大儲けをしたと思うわけですが、ファイザーの社長はワクチン打ってないんです。あれはテレビのインタビューでばれてしまったんだけど、社長は自分は打たないんですかと聞かれると、私はまだ若い人なんだからとしどろもどろに言っていました。だから社長も打ちたくないんだなって思っています。

③ 国家、社会、経済のシステムに飲み込まれた個人と、その個人の生存を保証するシステム

だから、こういうやり方っていうのも国民管理に過ぎないのですね。

それで国民管理の目的は、さっき言った経済活動に支障をきたさないとか、もしそれが有事ならば戦争に支障をきたさないとか、そういう形での管理に過ぎないということになってしまう。だから、国民国家っていうのは、こういう国家だって思うべきで、その出発点になっているのは国民という個人なのです。

それで市民社会もまた個人を基調に置いて築き上げた社会の仕組みです。資本主義も同じ

で、資本主義っていうのもみんなが個人になっていくから、結局みんなが働かなきゃいけない。みんなが働くようになっていくと、みんなが消費者にならざるをえない。だから簡単に言えば働きに行って帰りにスーパーで買い物して、そういう人たちが増えていくわけで、それが経済の活性化をもたらすのです。

だから、もし皆がどっかに居候しているような社会があったら、現在の社会が停滞してしまうわけです。そういうことを個人個人の経済にしていくことによって経済発展の道筋をつけるとするのは、資本主義の仕組みでもあったりするのです。すると、この近代社会で作った国民国家、近代社会、資本主義と言うのは、全て個人を基調にしてゆく仕組みになっている。ところがそれでやってきたら、それも限界に来ていて、さっき言ったように個人を基調とした経済システムは、激しい格差社会を生んでいるというのが分かってきて、これがもう世界的にそうになっています。

市民社会の方は、なんか一見いいようにいきそうだなと思ったら、本当に協力したり助けあったりすることはできない。この社会の弱さというのはいたるところに出てきて、それで国民国家の方は、我々はこれからもずっと国家に管理されるのだというふうに思わざるを得ない仕組みになってきているのです。こういう仕組みがこれからどうなるのか、なお使っているのか、これも一つの課題なわけです。

そうするとやっぱり出てくるのは、こういう近代の仕組みができる前の社会のあり方からいいヒントをもらい、なにか参考になるものはないかっていう。そういうところから思考を始めるのは必要なだろうという気がします。今はそういう時代であるから共同体というものに対して関心を持つ人が増えていたり、関係し合うとか結び合うとか、いろんなことに関心を持つ人が増えてきました。

④ 今の経済を発展させていっても人間は幸せになれない。

先月、僕のところに2人の人が訪ねてきて、一人はモンゴルの人でもう一人はインドの人、2人とも共通しているのは結構自分で事業をやって成功したっていうのです。だから結構な金持ちなんです。そうなんだけど、それをもうやめていて、今の経済を発展させていっても人間は幸せになれないという。そのことを二人とも言っていて、だからこれからどうするか。

モンゴルの人の説によると、モンゴルの奥の方にアルタイ山脈っていう（一番西側の方にあるんです）、そのアルタイ山脈から流れてくる気の流れがモンゴルを通過して、終点が日本まで流れてくるのです。それでアルタイ山脈から気の流れの地域っていうのが、不思議なことに全て自然信仰を持っている地域なんです。あそこは龍神信仰が強い地域で日本の龍神と全く同じなんです。それで、その自然信仰が強い地域は、もしかすると今の人間中心的な経済とは違う、新しい人々を幸せにできる経済っていうのを考えると、何かを提供できるかもしれないと思っている。それで日本で協力してくれそうな人を探しているというのです。あまり協力できることがあるわけでもないんですけど、向こうでもそういう発想の人たちが出てくるって面白いなという気がするんです。

それでインドの人たちは自然信仰圏ではないのですけれど、南インドの仏教徒でもあって、

その仏教徒の世界でも今までと違う、一言で言ったら人々を幸せにできる経済のあり方っていうのを作っていけないか、そういう思いになってきたらしいんです。両方とも極めてそう簡単に答えられない。かなり難しいことでもあるんだけど、ただ言えることはそういうことを考える人たちがいろんなところに出てきているんだな……。それだけは間違いなく感じるのです。

そういう意味で、片方では私たちに対して自然の克服を目指した問題点もあるし、旧植民地国の人たちの抱く思いもあります。しかしこれからの先進国の中では、おそらく下層階級の人たちの社会への報復が間違いなく強まっていくだろう。例えば、最近の中国の日本人学校の生徒への刺し殺し事件とかありましたが、あれなんかも反日という面が半分あるかもしれない。けれど、やはり中国の下層社会の持っている恨みと報復って言いますか、それが半分あるんでしょう。ですからそういうことを含めて、これからも社会の中にはいろんな「え〜」っていう事件が起きてゆく。そんな時代を迎えている事も認めざるを得ない。ですから、やっぱり原点としてはもう一度、共同体とは何だったのかっていう、そのあたりに立ち返ってものを考えることだと思います。

4、共同体とは何か。

① 共同体の形は歴史とともに変容してきた。

共同体っていうのは歴史的にも変化していくというか、正確に言っちゃうと共同体って言葉は昔からの日本語にはないんです。これは明治になってコミュニティを翻訳するために作った言葉です。それまで共同体っていうのはどういう言葉で表されたのかっていうと、ただ町とか村で組合とか組とか、あるいは講とか……つまり同業者たちはいろんな組を作っていました。それは商人の組とか信仰からの講という組織を作って助け合いをしていく。だから地域には村があって町があって、それはいろんな言葉で呼んできたものであって共同体っていう一つのくくりではないのです。

それが明治になって共同体という言葉が使われるようになるのです。だから僕はコミュニティと共同体っていうのは、全く同じ意味でいいと思っています。なんとなく感覚的には共同体って伝統的なものがイメージされて、コミュニティって言うとなんか新しいものをイメージしたりするんですが、そんなに区分する必要はないと僕自身は思っています。

そういうものにすぎませんから、共同体って言えばいろんな歴史的な集まりのありようです。これは時代によっても変わっていくことで、それがどういう集まりなのかによって内容が変わっていく。だから、例えば昔は鍛冶屋の共同体だったのが結構強固にあって、それは各地域の地元の鍛冶屋だった。その地元の鍛冶屋さんたちの上に地域の親方鍛冶屋みたいなのがいて。その親方の元に例えば20軒の鍛冶屋が集まっていて、そこで鍛冶屋として助け合っている鍛冶屋の共同体がありました。また鍛冶屋の神様がいたので（だいたい金山姫の系統なんですけど）、親方が掛け軸を持ってきて、そこに神様の絵が書いてあったりする。それで、集まりにその掛け軸をかけてお祈りをして、それからいろんな会合を始めるという、

そんな感じだったのです。それはいろんな形で助け合いをしていたので、まさに鍛冶屋の共同体なんですけど、これは職人共同体の一つの形です。そういうものもあるし農村共同体もあるということなので、共同体って決して一つのものではなくて、いろんな形で多様に展開していたんだということです。

② 今日でも視野に収められるものとしての江戸中・後期の共同体。

ただ、私たちが共同体という言葉から、ある程度その仕組みを推測できるものは、江戸期の共同体しかないってということなんです。その前の、例えば室町時代の共同体とか鎌倉時代の共同体とかになっていくと、ごく一部は推測できるにしても全容はなかなかわからない。ですから今、私たちが「昔の共同体はね」って言葉を使った時の共同体は、江戸期しかないって基本的に思えばいい。それは、江戸時代以前の社会っていうのは普通の人達が文献を残すということがまずなかった。だから、権力を持ってる人とかお寺さんとか、あと大商人と言う人たちが書付を残すことがあるんです。けれど、一般の人たちが何か記録を残していくことがない。ですから、資料として参考になるものがあんまりないってことです。

ところが江戸時代になってきますと識字率もあがってくるので、特に江戸後期ぐらいになってくると、かなり多くの人たちが一応文字を書いたり、読んだりするようになってきました。幕末の頃、日本の識字率がどのくらいかっていうのは（これも統計があるわけじゃないんですけど）、その道の研究をしている人たちだと、推計で一番多い推計だと80%ぐらいの人が読み書きができちゃった。一番少ない推測をしている人だと50%ぐらいじゃないかと思っている。だから、まあ50%にしても半分ぐらいの人が読み書きができた。それから当時の書き付けって結構誤字も多いのです。だからそういうミスはするんだけど、でも、とりあえず文字を書いたり読んだりする人は（8割なのか5割なのかは別にして）、当時の同じ時代の世界から飛び抜けていました。幕末の頃のフランスですと、識字率が10%ぐらいですから、ほとんどの人は文字が読めないという感じなのです。

日本は寺子屋に驚くべき力があったことになるんです。特に江戸時代後半ぐらいなんですけど、一般の人たちが残したものがたくさん出てくるんです。そういうものを参考にしながら歴史学者の人たちなんかが、どうもこういう社会だったらしいという予想ができるんです。

③ 惣村自治にもとづく農村共同体、城下町、商業都市などとして生まれた都市共同体。

ただもう一つだけ言っておきますと、正しい歴史というのは残念ですが僕らには分からないということです。歴史学者は古文書を基にして正しい歴史を書こうとする。

だけど僕から見ると（僕は哲学ですから）、哲学には歴史哲学と言う分野があるのですが、そちら側からいってみると正しい歴史なんて幻想に過ぎないって思えてくるのです。歴史っていうのは、今の問題意識から見えてきた歴史を「歴史」と呼んでいます。だから、今の一つの問題意識が……、例えば戦国時代といえば信長や秀吉や家康など、ああいう武将たちの戦いの歴史。ここに問題意識があれば戦国時代の武将の歴史に見えてくるわけです。

ところが僕なんか上野村にいますので、そうすると例えば戦国時代とは上野村にとって何であったか、何もありませんでしたと言いたくなるわけです。と言うのは上野村って、どこ

かの領主の領地ではないんです。山奥で田んぼが無いのです。それで金でも出れば必死に年貢を取りに行くでしょうけど、そんなものもないわけです。そうすると境界線の村ということもあるのですが、大きな領主に挟まれている。しかし、そこは何も取るものがないとなってくると、そこに入ってきたらと逆に向こう側の領主に警戒されるわけです。

だからいらぬ費用が必要になってくる。つまり警備体制をひかなくてはならないわけです。だから逆に非武装地帯ではないですけど、そこも空白にしちゃって、なんか阿吽の合意で誰も取りに行かないっていう、そういう不思議な自治区みたいなものが出来上がるケースがたまにあったんです。上野村ってそういう村です。ですから山を超えると武田信玄の領地になりますし、反対側に行くと北条の領地になります。北の方からは上杉が迫ってくることがあります。そういう場所だから、何もたいしたものが取れないことは、平和の時はいいことだったりするんで、それが故にうちは戦にも巻き込まれない。ご領主様が登場しない。ただ、そういうものだから戦国時代って言われてもなかったようなもの。村から見ればそうなんじゃないですか。

1600 年に関ヶ原の戦いがありますが、うちの村から言うと、関ヶ原の戦ってなかったのも同然です。まず、あんなところは誰も行ってないし、終わったからって何の変化もない。中山道からの脇街道が通っていることがあって、それで江戸時代になると天領化されて徳川の時代だなと実感したかもしれません。けれど、それまで戦国から関ヶ原の戦いまで、うちの村からみたら何もありませんっていう、そんなものなのです。

この歴史も「歴史」なわけです。歴史っていうのは、その時の問題意識から見てきたものを歴史と呼ぶ。だから上野村の歴史という問題意識から見れば、日本史なんていうのは大幅に変えていかなくてはいけないことになってしまう。その点、飯田は古代からいろいろな人は入ってくるし、街道もある。江戸期になれば物資の集積場でもあるということなんで、ここは何もなかったというところではないわけです。けれど上野村のような地域もあります。だからいろんな形の歴史が本来ある。だから、どれが正しい歴史なのかって言われても困るわけです。今、私たちの問題意識では、こういう歴史が見えておりますとしか言いようがないのです。

だから、日本史なんていう歴史があったのは幻想に過ぎない。そういうことだから逆に、例えば今個人がバラバラになってしまった社会を何とかしなきゃいけないなという。そういう問題意識を持って江戸時代を見ると、なんか結構うまいことを、いろんな共同体が作りながらやっていたんだななんていうのが分かってきて、それがヒントになる。ただし、それが本当の江戸時代だったかどうかは分かりません。違う問題意識で見たら、違う江戸時代が見えるかもしれません。

だから、環境問題が大きくクローズアップされ始めた頃に、僕の東京の家は文京区っていう区なんですけど、場所から見ると後樂園に近い。後樂園からもうちょっと皇居の方に近づくとも水道橋駅があり、あの辺りは江戸時代に瓦を焼く作業場、瓦屋が何軒もあったのです。そのことを発見した人たちが、これは江戸時代の巧みなやり方だと言いはじめた。というの

はあの場所は外堀に面している、外堀ってというのは防衛のためというよりも、むしろ物資を運ぶ船を通して、そのための場所みたいなところなんです。ところが、どうしても上流から土砂が入ってくるので、川底が浅くなっちゃう。そうすると船の運航に支障をきたすので、少しずつ浚渫をしてゆく必要性があったのです。

それに対して、一方で江戸の町ができていきますから、そうすると瓦というものがたくさん必要になってきたわけです。ところが瓦ってというのはできるだけ消費地の近くで焼きたいわけです。なぜか、大変重いからです。今だったらトラックで運んじゃっていいんですけど、あの当時大量に輸送するっていうのは相当に大変なんです。だから、できたら消費地の横で焼くとよい。そしたら毎年浚渫する土が瓦を焼く粘土に非常に適しているという。それでそれを使って（浚渫した土をあげるのが水道橋あたりだったんで）、そのあげた土を貰って瓦を焼いた。そうしたら、もう江戸の町のすぐ脇で焼いているわけですから、これは大変便利であった。そういう点ではうまいことやってはいるんだけど、別に当時の人が環境問題を考えてやったわけじゃない。そうなんだけど、それを発見した人たちは、そういう問題意識でみているから、これは環境的に大変優れたリサイクルの仕組みであるというふうに見えてきた。だから別にそれでいいんで、環境上優れたリサイクルの仕組みだということをヒントにして、何か今日でも変われるか、そういううまいことにできないのか……そういうことを考えていくのだったら、それでいいんです。だから歴史を振りかえるっていうのは、正しい歴史を知るためではなくて、私たちの問題意識から歴史を見る。その問題意識に対してヒントをくれる。そういうことだと思った方がよいということです。

もう一つお話ししますと、僕は日本との比較地としてフランスを使ってきた人間なので、よくフランスへも行った。けれどフランスでもつまらない町って言えば、パリとか……だいたいどこの国へ行っても首都が一番つまらないのが通り相場なので、田舎に行けば行くほどなかなかいい村があったりするんです。僕は魚釣りが好きだから、時間が余るとちょっと田舎に行って釣りをしようかなっていう感じでもあるんです。

ただ、やっぱり向こうの村と日本の村と比較すると、やっぱり違いがある。一番感じるのは、社会っていうものを考える時の社会観です。向こうの社会観っていうのは生きてる人間だけで作っているのが社会。だから、あの社会契約っていう考え方も出てくる。つまり生きてる人間だけで社会を作っているから、その生きている人間たちが集まってよく議論をして、自分たちでルールを作って、それで契約をして、それをみんなで守る。そうすればいい社会ができるっていう。実際には生きている人間がドロドロ集まってきて、みんなで議論して、いい意見をまとめるっていうのが至難の技ですけど。だけど、理論的には可能な話になるのです。

5. 日本の伝統的な社会観＝共同体観について。

① 自然の生者と死者と神仏の社会。

ところが日本では社会契約など成立しないんです。なぜかという、日本の社会を作って

いるのは生きている人間だけじゃなくて、自然と人間である。自然がこの社会を作っていて、それへ人間も一緒に混ぜてもらっているという。だから社会と言うのは自然と人間の社会っていうのが日本の社会観なのです。そうすると自然も含めて社会契約していかなきゃいけないんで、そんなのは出来るはずがないっていうことになってくる。さらに言うと人間の方も生きている人間だけじゃなくて、死者を含めてこの社会の構成メンバーなんです。だから正確に言うと自然と生者と死者の社会。だから亡くなった人たちが姿は見えなくなったけれども、なおこの社会のメンバーとして生きている。そういう社会観を持ってきた。それから自然と死者たちが社会メンバーなので、そこには神仏の世界ってのがあって、それで神や仏もこの社会のメンバーなんです。

②自然と生者の関係が社会をつくり、生者と死者の関係が社会をつくり、さらに生者と神仏の関係が社会をつくる

こういうふうに言っちゃうと誤解されるといけないのは、宗教、信仰って言葉は、これも明治になってできた翻訳語なのです。だから 江戸期までの日本には宗教も信仰もないと思ってもらっていいんです。だけど、言うまでもなく日本には神様がいたし、それから仏教だって古代に入ってきています。ですから、そこらにお寺があったり、信者があったりする世界があったのですね。じゃあ、あれは宗教でも信仰でもないんですかっていう話なんですけれども、ないんです。つまりどういうことかというとなんか大事にしていかなければいけない隣人みたいなものなんです。

例えば僕が上野村にいと、上野村は山だらけですから山の神がいっぱい祀られている。それで、山の神は森を守るっていう話、これは山の神信仰をもっているところはみんなそうです。だけど、これがいつも面白いと思っているのは、村にいと山の神が森を守ってるんだから、その山の神様にお礼を言いながら山へ入るのがいいなと思っているのです。でもいいなって感じるけれど、山の神って本当にいるんですかっていう話になると、誰も会ったことがないんで……、まあ、いることにしておきましょうぐらいの話なんです。それでじゃあ、教義は何ですかって聞くと、森を守ってるしかないわけです。

あと伝えられていることっていうのは女性神であって、それも非常に美しくない女性であるという。そのために美しいものを見ると嫉妬するという。そういう神様が出るとよく言われたりするんです。それぐらいの話しでしかなくて、これじゃ教義にならないんです。けれども山の神は村では大事にされているし、仮に僕が山の神の信者になります、入れてくださいと言っても、入るところがないんです。それぞれの場所に山の神を祀ってあるだけであって、山の神教なんていう団体もない。だから会費を取られることもないし、逆に入っていないから脱退もできない、村にいと限り脱退する気にもならない。

また僕の家は水道の水源には湧水を使っているんです。誰も信じてないけど弘法大師が発見したことになっている。その湧いてくるところには水神様が祀られていて、その水神様がしっかり守ってくれているので、一年中安定して水が出るということです。けれど、それでいいじゃんだけの神様なのです。水神って本当にいるんですかとか言われたら、もうみんなが

困ってしまうわけです。ただ、この村にいる人が水神様の横を通る時には水神様に頭を下げ、山の神の横を通る時には山の神にも頭を下げて、それで「いいんじゃないの」という。つまり日本の信仰というものは、そういうものだから大変力があつたりするけれど、良き隣人である。我々を支えてくれている良き隣人である。そこに神や仏の世界がある。だから明治以降、我々が感じているような宗教でもないし信仰でもない。だから、神仏の世界っていうのはそういうものなので、決して宗教ではありません。

だから、それは信仰上の行事なんですけれど、信仰と同じくらいやっているものもいっぱいあるわけです。例えばお祭りっていうのは神様を降ろしてきてやっていく、れっきとした信仰の行事なんです。だけど、「今日はどこのお祭りだ」って聞いて、厳粛な気持ちになる人はあまりいないのです。みな「遊びに行こう」っていうような感じで遊びに行く。それを、神様も許している。あれも信仰だけど信仰じゃないとも言えるような、微妙だと言えます。

あるいは例えばどっかの家で今日法事があって、つまり法事も信仰行事なんです。だけど、法事に行ったらどっかの宗教団体に勧誘されるわけでもないし、特に強い信仰心を持っているわけでもない。だけど、むしろみんなが、そういった集まりになったら「私も行こうかな」っていうぐらいの感じでやっています。だから私たちは今でも宗教でも信仰でもないんだけど、見ようによっては信仰の行事と言ってもいいことがたくさんあったんです。だから、こういうものが江戸期までの神仏の世界です。

③関係が社会をつくるという視点。

だから正確に言っていくと日本の社会観っていうのは、自然と生者と死者と神仏が作っているのが、この社会であるという社会観を作ってきた。それはもっと正確に言うと自然と人間の関係がこの社会を作る、生者と生者の関係がこの世界を作る。死者も生者と死者の関係が社会を作ってくれる。我々と神仏の関係も社会を作っている。だから死者って本当にいるんですとか、神仏って本当にいるんですかという、そういう発想じゃなくて、私たちはそういったものと関係を結んでいることによって、この社会をつくっている。そういう社会観を作ってきたんだということです。

6. 結び合うことから生まれてきたもの。

① 結び合いから生まれる経済。

だから、今でも土地神様とか地主様とか産土神様とか、いろんな畏敬の念を持って接する神様を持ちながら、しかし、これは 宗教じゃありませんみたいな世界を作っているわけです。やっぱり明治になってくると、そういうものが全て欧米化されてきて宗教とか信仰という概念に縛られることになった。そのあたりもこれから共同体を考えていく時には念頭においてもいいことっていう気がしてきます。というのは人々が結び合っていると、そこには必ず何らかの信仰のようなものが生まれるということなんです。それに一番小さな共同体っていうのは家族。家族の場合にもし家族が機能的な役割だけの分担だけでしたら、その家族って非常に弱い家族。例えばお父さんはお金を持ってくる人。お母さんは家事をする人。それ

で子供は今投資してもらっているけど、将来は投資の成果を親に返さなければいけない。そういうことをやったら、どっかが破綻した瞬間に分解するというのは誰でもわかります。やっぱり家族っていうのはそうではなくて、なにかそこに祈りのようなものが発生してくる。

だから子どもが生まれてくると、その子どもが無事に大きく育ってほしい。これも一種の祈りみたいなものです。子どもの方も小さいうちは、だいたい反抗したりするわけですけど。大人になってくると、お父さん、お母さん長生きしてね、みたいな気持ちを抱くようになっていく場合が多くて、それもまた祈りみたいなものです。

だから、実は家族を結んでいるものって、お互いの祈りみたいなものがある。少々その機能的には破綻する事件が起きても、何とか皆で乗り越えていこう。そういう強さも持ちうるということです。だから、一番小さい共同体の家族っていうのは、経済的欠乏でもなく、機能的欠乏でもなくって、むしろ一番奥には祈りのようなものによって結ばれている。そういうものを作っていることです。

② 結び合いから生まれる文化。

祈りが通っているには、そこに何か共有されている価値が（価値基準みたいなもの）共有されているから、そこで、それがうまくいくように祈りのような気持ちが出てくるということです。そうすると一瞬だけ人間はつながりを作ることはできるんだけど、それが共同体的な持続性を持って機能していくことになってくると、そこに何らかの祈りのようなものが出てくる必要性があります。

それはさっきの鍛冶屋で言えば、鍛冶屋の世界を後世に渡していく。そういう、つながりへの祈りというようなものがあります。この祈りを見守っているのが掛け軸の神様だったりして、それを毎日見ている訳です。じつは鍛冶屋の神様がいることを知っていたんだけど、あれは鍛冶屋以外には見せないという原則なんです、僕も見ることができなくなってきました。あるとき（長野県のある地域なんです）、ある鍛冶屋さんにあって（いま、その方は親方なのですけれど）その話をしたら、時代が変わったからいいでしょうみたいな話になって、それで見せていただきました。それでも、もともとは自分たちの祈りの集約点みたいなのは、この鍛冶屋の神様にあったって言うのです。

実は、鍛冶屋の神様と山の神とは同じなんです。山の神って呼んでいるものには2系統があって、鉾山系と森林系の山の神がある。でも両方とも同じものなんです。その鉾山の系統で働いている人達から鍛冶屋が出るんで、その山の神が里へ降りて鍛冶屋が神様にしたという感じなんです。けれど、一応見せて頂きました。そこにあるのも信仰の共有なんです。しかし、それも何とか教の共有ではないわけで、そういうものと共に自分たちの歴史を作ってきた、それをまたこれからも繋いでいこうという。そういう祈りの世界みたいなことがあるということです。

③ 価値の共有が支えた経済、文化、「信仰」。

だから共同体社会っていうのは、そういう意味でいろんな伝統的な信仰を作ってきたといえるので、それは山の神信仰をつくったり、水神信仰をつくったり、産土神信仰をつくった

りとかします。

こっちもそうでしょうけど道祖神信仰なんかも結構あるでしょう。道祖神信仰って不思議な神様で、あれは外来系の神様なのですね。土着系ではないのです。だけど道祖神というのは、あれは悪霊なんです。悪霊なんだけど家の中に入ってくる悪霊とか地域社会に入ってくる悪霊を追っ払ってくれる悪霊なんです。それは昔の日本の考え方の中に、善人、良い人っていうのはいつもいいことをしているけど、肝心な時には大した力にならないということがあります。つまり小さな善しかできない。それに対して、悪人がその悪の力を持って善のために使おうとした時には巨大な大きな力を発揮するという、日本の社会って一種の悪人信仰みたいものがあるんです。

だから今のヤクザはちょっとダメですけど、昔のヤクザの話なんかそうです。ヤクザというのは悪人なんです。その悪人となるヤクザは世のため人のために悪代官をたたき切るとかですね、とてつもなく大きな善をやる。わが群馬県には国定忠治という有名なヤクザがいて、今でも八木節という民謡になって残っております。悪代官をたたき切った。結局、善人ってそこまでできないわけです。そこで悪人が悪の力を善に転じさせた時にのみ、巨大な力を発揮する。そういう考え方が昔からあって。だから一面では我々は悪人にならなければいけない。でないと大きな社会改革とか人のためになることができないのです。

7. 共同体と伝統的な信仰。

① 自然信仰。

今日私が着ているのは修験道という T シャツなんですけど、これは奈良吉野の金峯山寺が売っている T シャツなのです。実はこの T シャツ「こういうもの作ったらどうか」って思って提案したのは私なんです。本当に作って、そしたら結構よく売れるとか言って、お礼にと何枚も送ってきました。ちょうど便利だったので着ているんです。私はあの金峯山寺から名誉大先達をいただいております、一応、修験道の人でもあるんです。ちゃんと修行しなきゃいけないんだけど、僕は「修行はくたびれるから嫌だ」ってしないので、ちゃんと修行した人は、ただの大先達になっていくんです。けれどしないから、上に名誉をつけてインチキ大先達をやっています。

あその金峯山寺は節分の日には豆まきをやるんですけど、あそこは昔から「鬼は内」なんです。それで全国で追っ払われて寂しい思いをしている鬼は、みんなうちのお寺においでって言うんです。そうすると日本中の鬼が寺の中に集まってくる。それで今までの行為を反省して、それでこれからは仏を守るために力を使うと決意して、それで我々にはできないような大きな力を持って仏を守るという、そういう言い伝えから、鬼は内という豆まきがあるんです。

そういう善の力も悪の力もある。それで道祖神というのは悪霊なんだけど、その村とか家の中に大きな悪霊が入ってくるときに善人の力ではどうにもできない。悪の方の強い力で、それを追っ払ってくれる。巨大な悪霊が大きな善をなす。だから、その悪霊転じて守り神に

なれるというか、入り口を守ってくれ神になったという、日本に来て逆転してしまったのです。それがいつのまにか双体道祖神なんかになって（あれはどうして、ああいう変貌をしたんだという気がします）。けれどそういうことも含めた日本の信仰の世界があって、そういうものと共有しながら共同体が形成されているのです。

だから、宗教、信仰の概念を我々は一辺壊さなきゃいけないくて、昔の宗教観、昔の信仰観に戻した上で、やっぱり人間たちが集まってきて共同で何かやっていこうとする。するとそこに一種の祈りが発生したり、それを信仰と呼べば信仰が発生したりするんです。だけど、それはどっかの教団とかに属さない、そういうものだと言っても良い。

それで日本の場合って 500 年代前半に、教科書的に言うと百済の聖明王から經典と仏像が送られてきて、日本に仏教が入りました（538 年説が強いんですけど）。ただし古代の仏教っていうのは国家護持の仏教なんで、民衆仏教が発生していくのは鎌倉仏教になってからです。だいたい高校の教科書ぐらいに、そういうことが書いてあるって感じです。

② 私度僧＝優婆塞＝聖とともに展開した民衆仏教。

この教科書の節は、実際には嘘だと思っているんだけど、そうじゃなくて古代の時代っていうのは日本にたくさん渡来人が来ていました。そして百済、新羅から来る人も多かったけど、結構中国から来ていました。中国の国内不安とか、あと朝鮮半島の社会不安とかいろいろあって、それでいられなくなった人たちが日本に逃げてくるという、そういう感じもありました。

日本から見ると先進的な技術を持っている人たちだったので、来てもらっても悪くなかったです。ですから、たくさん渡来人が来たんです。その渡来人たちが勝手に持ち込んできた仏教ってのが結構あったはずですよ。記録上は 522 年に司馬達等が中国からやってきて、お堂を作って本尊を安置し帰依礼拝したみたいなことが伝聞として書かれていて（どこまで正確か分かりませんが）。それが事実とすれば、よく言われる仏教伝来の前から、仏教は伝来したんじゃないかという話になっちゃうわけです。ただ多分いろんな形で人々の持ち込んだ仏教があるんですね。その人たちの仏教っていうのは民衆仏教の世界を作っていて、それは日本の自然信仰と合体してゆくのです。

③ 自然信仰、道教、密教の結合から生まれた修験道。

それはお寺を作っていく仏教じゃなくて、森林の中に修行場を作っていく、そういう仏教なんです。それを日本では山林修行と呼んでいます。山林修行というのは非常に古い言葉なんですけど、それで山林の中に修行場を作って、そこで修行した僧は国家に認定された正式な僧侶ではなくて、私度僧とか聖と呼ばれたり、行者と呼ばれた上人と呼ばれたりしていくんです。

そういう人たちが民衆世界で活躍する。そういう仏教を古代から作っていった。それは正式になんとか教ではない仏教です。700 年に入った時に日本は律令制度を制度化するんで大宝律令ができるんですけど（確か 701 年じゃないかなと思うんですけど）、この大宝律令ができた時に、そのなかに僧尼令という命令があって、僧尼令っていうのはお坊さんや尼さんに

ついでの規定です。その中で尼さんやお坊さんはこういうことをしちゃいけないとか、そういうことも書いてあるんです。

けれど日本において禁止されたことがあって、一つは私度禁止令という、勝手に坊さんになるのは禁止です。つまり坊さんはあくまで国家資格でやらなければいけないという決まりです。それから二つ目が山林修行禁止令で民衆仏教の世界を禁止する。三つ目は民衆への仏教の布教の禁止。だから、あくまで仏教は国家のためにあるんで民衆世界に降りちゃいけないという。その3つを柱にする僧尼令という命令で大宝律令の中にはあったのです。

そういうことに示されているように、逆に言えばいかに私度僧的な世界に山林修行が広がって、しかも民衆仏教が広がっていたので、それを国の法律で禁止せざるを得ないぐらい広がってきたと思われるのです。そういうものを母体にしながら人々の仏教社会がだんだんだんだんできていくんです。その後で山林修行じゃなくて、鎌倉時代ぐらいになってくるとお寺を作るようになってくるんです。

④ 修験道と講組織のひろがり。

そういうのを母体をしているから、日本の仏教の世界は厳格な宗教団体という感じよりも……、昔はお寺に集まったりしているけれど、だからって真面目な信者でもないような、そういう世界として共同体の宗教みたいな性格を持っていたということです。だから共同体を考えた時にこれから要になっていくのは祈りとか信仰ってという言葉かもしれない。我々はどういう祈りを共有でき、その祈りの共有としての信仰ってもしえる。

さっきの僕の話で言えば、例えば水神様が祀られている様に、「水神様にこれからもよろしくお願いします」みたいなお祈りをしたりするわけです。だけど、そういうものを村の人たちが共有していて、みんなその水神様の横を通る時には頭を下げたような感じがあります。そういうものを軸にして村が出来ている。

だから、それを外してしまうと共同体にならなくなってしまうことでもあるのです。だから、そのあたりをどう考えて回復していけるかっていうのは、これからの課題でもあるし、またさっきフランスの場合って、社会契約で人間だけの社会だからいけると言ったんですけど、日本の場合には自然と生者と死者と神仏が関係を結びあって、この社会をつくっている。そうすると社会契約なんていう薄っぺらい話ではすまなくなっちゃうわけです。

8. まとめに代えて

じゃあ何が必要かというところ、ここで祭りとか行事が重要になってくる。

つまり、あの祭りをしながら神仏を感じたり自然の神を感じたり、そういうものを通して自然や神仏の意志、あるいは死者の思い、そういったものも反映できるように私たちは社会を作らなきゃいけない。だから、いくら自然と生者と死者と神仏といっても、生者以外は会議をやっても出てこないです。あるいは出てきても見えないかもしれません、けれども、とりあえず発言してくれないわけです。そうするとその生者、生きている人間たちが自然の代理人でもあるし、死者の代理人でもあるし、神仏の代理人でもあるという、そういう形で自

分たちの社会づくりをしなきゃいけない。

それをしようとする祭りとか年中行事とか、そういうものを通して我々の生きている世界を絶えず再確認していく、それが必要になってくるのです。だから日本の場合には祭りとか行事っていうのは伝統的な行事です。けれどあれはイベントではなく、むしろ自治の仕組みだって考えた方がいい。そういうことを通して自分たちの社会を作っていく。そうすると社会が変わってきていますから、この社会の中で人々が集まって、そこにどういう祈りだったら共有できるのかという、その問題がでてきます。

もし何らかの祈りが共有できた場合には、その祈りを繰り返し、繰り返し確認するための祭りとか行事とか、そういったものをどういう形で企画化できるか。そういうことが試されていることになる。だから 欧米の地域づくりの真似を日本でしてはダメなんです。

これで一応、終わりにします。(拍手)

質疑

A さん (中川村)

Q=共同体とかお祭りのお話でございましたけども、中川村ではやっぱり御柱祭というのがございまして、私は関西からの移住者のもんですから、なぜあんな意味の無いことを行おうのかと思っていました。ちょうど6年に一回ということで、あれは地域のパワーが活性化したり人と人との繋がりができたり、ここにこういう若い人がいるとかが分かって、一種の共同体の活性化と選挙に変わるような民主主義の場だということも感じている次第です。

今日は経済のお話も中心だったと思うんですけど、逆に言うと民主主義が世界中でもうダメになっています。私の住んでいる柳沢という集落の中では物事を決めるのに選挙はしない。投票もしない。みんなで合意形成をやっていく。そしてその長になる人も（伍長って言うんですけども）、昔の5人組、江戸時代の歴史が繋がっているんじゃないかと思うんです。そういう形で隣組の人を一年ずつ選んでゆく。そして30数軒の集落でも総代というのが一年ずつの平等に年齢順で回ってくる。そういう形で合意形成をして共同体の運営をしていくというやり方が今の日本だと思うのです。

世界中の民主主義で、選挙という多数決の仕組みがおかしくなっている中で、それに対する別な形の合意形成として、みんなでハッピーで（ハッピーかどうか分かりませんが）受け入れられるものを探していこうという仕組みとして、ひょっとしたら可能性があるんじゃないのかなと思っているんです。けれども、そういう伝統的な共同体のあり方に昔は田舎の共同体というと閉鎖的で時代遅れみたいだと思っていたけれども、ひょっとすると逆にこういう時代の先端の可能性を秘めているのではないのかなということを最近感じているんです。

内山先生はどのように共同体から、そういう政治というか民主主義の可能性みたいなところをお話いただければありがたいです。

A=日本の共同体の意思決定っていうのは、多数決はありません。ですから満場一致のみ

が伝統的な形式なんですね。そのようにいうのは、昔の共同体っていうのはず〜っと一緒に生きてく社会っていうことです。そうすると禍根を残すことが一番嫌なわけです。ですから多数決を取っちゃうと勝ち組と負け組が当然できてくるわけです。だけど、その負け組になった人が、自分たちが間違っていたから負けたんだって思ったら簡単なんだけど、そうはいかないわけです。やっぱりそこからいろんなわだかまりとか出てきて禍根を残す。それを嫌がるから満場一致になるまで頑張るという。それが日本の意思決定だったのです。

満場一致を取るためにいろんな方法を使ってきたわけで、一つはさっき言ったように生きる人間の都合だけで意思決定をするんじゃないくて、自然の都合とか死者の都合とか神仏の都合とか、それも含めて意思決定するっていうやり方をとることです。自分の考えだけに固執しちゃだめだよって話になってくるんで、意外とみんなでその落としどころを探るというか……、それがやれるって事が一つはありました。

もう一つは利害関係は絡んじゃっていると、例えば畑の境界線の争いが入っているとかがです。そうすると簡単に引き下がれなくなっちゃうので、そういう時にはどうするかというと、やり方が二つあるんです。一つは満場一致が取れるまでずっとやるっていうのです。これは夜始めて……、夜始めるけど徹夜でやって。それで途中からおにぎりの差し入れなんかやって。それでその伍長にあたる人が、ここで「2時間休憩、仮眠」とか言って、また2時間後に起こして始める。それを2日か3日やっちゃいますと、もう皆も仕事もあるし、早く終わらしちゃいたいっていう。だから、もうこの辺で手を打とうよって話になってくるのを待つっていうやり方が一つある。

それから、もう一つは地域の中の長老的な人で人々の人望がある人、その人にまとめるように依頼するっていうやり方もあります。その人は例えばAさんとBさんに利害問題があってずっと対立しているということになった時に、毎日のようにAさんとBさんの家に行くんです。家に行って来られた方は何のために来ているかは分かっているんだけど、その長老はその話は一切しないで、「お宅のお孫さんが元気になったね」とかそんな話をして帰っていくわけです。それを散々やっているうちに、そろそろ「本題に入ってくれないか」という気持ちになってくるのを待って、初めて「ところであの話なんだけど」という話が始まる。それを確か密々の合意っていう。つまり、まだ合意していないんだけど「そろそろ合意してもいいよ」というサインが出たっていう。それが確か密々の合意じゃないかっていう。それで、あの件なんだけど「この辺で折れちゃあくれないか」とかいう話が始まる。その結果「もう、もういいよ」みたいになると、それが内々の合意ではないかと思うのです。

内々の合意が取れたことになって、寄り合いが集められる。それでその寄り合いの席で伍長にあたる人から、あの件なんだけど、「こんなところで集落の意見ってどうだろうか」という。そういうような話が出てきて、もう和解し、それで結構ですと両方が言うっていう。そんな感じですね。そこから内密って言葉が発生している。だからその密々の合意と内々の合意をとっていくというのだから、それが取れるような一応人望のある長老に間に入っても

らう。そういうことをする場合もある。

だから、いろんな手を使いながら、とにかく満場一致に持っていく、禍根は残さないっていう。これが日本の元々の意思決定です。

それで、いわゆる民主主義と言われている多数決で物を決めていくっていうやり方は、実はこれでは出来ないことはないんです。けれど満場一致は小さなグループにおいてのみ成立する仕組みなんです。だから小学校のクラスぐらいと思えばいいんです。小学校のクラスぐらいだったら、例えば 次の運動会に何やろうかって話になった時に、みんなで活発に意見を出し合って。その結果議論して最終的にじゃあこういうことにしようって決めると、その時に自分の提案が否決される結果になっても、それぐらいでやってれば今回はこういう形にするけど、来年は君の意見入れて少し考えようとか、そんなことをフォローしておくこともできるわけです。だから小学校のクラスぐらいのレベルの小さな社会においては、民主主義はやりようによってはできる。だけど、それは大きな社会に持ち込むと全く機能しませんということなんです。

だから規模が小さい、その寄り合いができるぐらいの範囲で民主主義をやればできないことはない。ただ、その場合に寄りあいていうのは、本当にず〜っと一緒に暮らしていく場所。そういう世界で作っているから、そうするとどんな禍根も残すのは嫌っていうことになり、そうなってくると民主主義ではなくて満場一致まで頑張るといって、あの仕組みが生きてくる。

そうじゃなくて、ず〜っとこのメンバーで生きていくのではない社会になってくると、民主主義は成立するのかな。それでも小学校のクラスぐらいの規模なら、その生徒たちが、ず〜っと一緒に生きていくかどうかかわかんないけれど、いま一緒に生きていることを大事にして、お互いに配慮しながら意思決定をするっていうのはできないことではないのです。

だから、あくまで満場一致は小さい規模で成立する仕組みです。それを大きな規模で民主主義が成立するように考えるのは、これはもう幻想に過ぎないんです。だから、これからは民主主義のボロがどんどんどんどん目立っていくようになっていくでしょう。

ただ残念なのが、その民主主義に代わって小さい意思決定を大事にするようにしていくと、今の社会制度に合わない。だから中川村の一集落だったらそれでいいと思うんですけど、そういうところっていうのは中川村とか上野村とか、ごく人数的には限られた人数の世界になっちゃっています。そうすると否応なく今の制度のもとでやっていこうとすると、もうちょっと民主主義を大事にしましょうとか、それから少数意見もちゃんと配慮しましょうとか、そんなことを言い続けるしかない。言い続けるしかないけど、この仕組みは破綻しています。破綻しているんだけど、それに変わるうまい方式はないっていう状況です。だから、しょうがないのでみんなして防衛しているみたいな、今の民主主義ってそんなものになっているんでしょうっていう気がします。

だから近代に作った仕組みっていうのは、もう限界に来ているって事なんです。ただやっぱり最終的には本当に中川村の一集落みたいな、小さい世界の積み上げで、どういうふうに

社会を作っていくかっていう方向へ向かっていかないと、最終的な解決にはなっていないという感じがします。

Q=ありがとうございます。ちっちゃい組織だと成り立って、大きくなっちゃうとだめだよっていう。それは全くその通りだと思うんですけど、なんか今の未来、一緒に未来を進むのではない人たち同士で、多数決じゃない多数が少数を支配しない形で、なんとかみんなが受け入れられる、合意を作っていく方法はないのかなというのをすごく思っています。

そのために、今デビット・グレーバーとか人類学者の生活がそういう別の合意形成のありかたをしているので参考にしたいと思いました。また教えていただきたいと思います。ありがとうございます。

B さん（鼎）

Q=私は、この丘の上の下段の町から参りました。昭和 30 年から 40 年代の初め頃までは米作りの作業で田植えから（今はちょうど稲刈りが終わったくらいです）。もう共同体なしではやっていけなかったわけです。私の家も代々農家なので、今日はこの家の稲刈りを一緒にやり、次の日はこの家を皆でやる。田植えが終わればおさなぶりをやり、それから新米が収穫できれば、どこかの家に皆が集まって五平餅を食べる。その時の美味しさって私は今でも覚えているんです。

今その共同体が形は残っているんですけども、もう農家を専業でやっているところは本当に数えるほどしかなくなってしまったのです。例えばお祭りの時に参加するとか、役員が回ってきたら役をやるとか当番に出るとか、そういう形でしか残ってないんです。最近、その自治組合も（うちは 10 軒あったんですが）ポロポロと抜けていく人がいるんです。理由の一つは役員がもうできない。本来だったら理由があるんです。家族が病気で役員をやることできない。自分が高齢でも動けない。息子は引込もりで家にいる、誰も出ていけないということが珍しくなくなっちゃうんですね。

本来の共同体だったら、そういう時にこそ助け合う。畑の草刈りができないならうちで手配してやりますよとなる。最近、区の広報を見たら、私がいる区の区長が自治会に入ってもらうようお願いに行くと、みんな断られるって言うんですね。一つの理由は役員が引き受けられない。それからゴミの当番が必要だしって言っても、ゴミの集積場所の管理なんか市役所の仕事だろう。組合に入ってメリットは何ですかって聞かれるわけです。それに対して区長は明確に答えることができないっていうことをさいさん会議の席で言っているわけです。ハザードマップの赤いところはいくつもありますので、災害の時に助けてもらいますっていうのはどうでしょうかって言ったら、あまり、そういうことはないと言われたんですね。で、そのゴミの管理者については、もう本当に喫緊の課題だと私は感じているんです。だから、昔の共同体の形のままで、今は自治組織という名前が成り立っていたら、急速に高齢化が始まっているので、少し考え方などをお聞きできたらと思います。

A=これから日本の社会全部が高齢化していきますので、どこでもこういう問題が出てくる

と思うんです。さっき自治と祭りって言いましたけれど、日本の神事っていうのは世界では不思議な性格を持っていて、さっき言ったように祭りって神事なんです。神様を降ろしてきて祭るわけですから。ところがその神事と娯楽が一緒になっていて大いに楽しむ場所にもなっているわけですね。

それから、昔はそれが助け合いの場所にもなっていて、祭りを通していろんなことを助け合っていくような機能を持ってきました。だから、日本の場合には神事、神仏のことと、それからその娯楽ということ。それから助け合いというのが一緒になって分離不可能な形でできる。これは結構世界でも珍しいんです。

そうすると今のいろんな自治会の仕事という形になっているものは、ただの役割分担になっちゃっていて娯楽的要素がないのですね。それで神事でもない、助け合いでもないっていう。そうするとただの労力奉仕になってしまうのです。そこら辺のことがあるような気がしてならないのです。それは先ほどのように昔だったら田植えをするにも、稲刈りをするにも、みんなの結で一軒一軒やっていくことでした。それが機械化されてきて別にみんなでやらなくても一軒だけでできるようになったことでもあるんだけど、昔やっていた、みんなして結の形でやっていた。そういう田植えというのは、仕事としてもやっているけれど、それがまた一つの娯楽でもあった。だから、終わった時にはみんなして、ちょっと楽しみというようなこともあったし、そこには多分、田んぼの神様とかそういうものも登場してくるわけです。

そうすると例えばゴミ処理でも、ゴミ処理とともにどういうふうに娯楽をくっつけていくのか……、つまりそういう知恵が全然働かなくなっちゃっています。そうすると単に市役所の下請けをやっているみたいになってきて、そんなの市役所の仕事だろうっていう意見がだんだん台頭してくる感じです。

だから、もういっぺん日本の行事っていうのは、「神事」「娯楽」「助け合い」という三つからなっていたんです。そうするとゴミ処理を通して、なんか助け合いができるのかどうか、そういうようなことも工夫を考えてみる。これからすぐに行わないと、ただ、この仕事が地域で必要だからやってくださいだけだと、やっぱりどうしても続かなくなっていくっていう感じにならざるを得ないんじゃないかって気がします。

だから特に日本の人は祭りとかひと騒ぎするのが大好きなんで。そういうことができるような、何かあってもいいんじゃないかなっていう気がするんです。

Q=ありがとうございました。娯楽と神事と助け合いですね。

Cさん

お聞きしたいのは共同体の中に、女性っていうものと男性っていうものがどうあるのかっていうところがすごく疑問です。私が育ってきた中で共同体っていうのはあくまでも男性のもので家長が担い、共同体として男が担いました。家っていうものに対して博愛とか慈愛とかの助け合いはなくて、どっちかっていうと大の男、家長が居ないと一格下の家ということで、その人たちを助けようという感覚っていうものの会話は無くて、対話っていうものを全

く感じない中で共同体を生きてきました。

結っていうのも同等の助け合いができるものが同等にあるっていう感じで、助け合いのお互い様ができない相手は助け合う価値がないみたいな、そういう感じで男のものであるような気がしています。そこに夫が死なれた寡婦は、その同じ住民票じゃない格下っていう。共同体の助け合いというものに、同じ慈愛を感じなかった私に少しでも答えをいただきたいと思います。

A=日本の家というのは、元々は労働協同体なんです。だから昔で言えば多くの人たちがお百姓さんだし、それからお百姓さんじゃない人たちは都市部で商人だったり職人だったりしていく。だから皆さん家業を持っている訳です。その家業を軸にした労働共同体として家が元々はできているということです。

ところがその時に武士の社会はそうじゃなかったわけで、武士という男性ありきです。それを頂点において、それで女性たちはその男たちが主君に対して十分な働きができるようにサポートするっていうか、そういうことになったのです。

これは何が違うかって言うと、この男性中心の武士の社会の思想的な軸にあったのは儒教なんです。儒教ってというのは徹底的に男尊女卑の世界なんです。それに対して庶民の方には儒教は入らないわけです。ていうのはその男性中心とか言っても、みんなでその家業の共同体を守っているわけで男性中心では成立しないわけです。だから日本では儒教は古代から入っているんですけど、明治になるまで民衆の中には全く入らない、武士の中にだけ入っていく。そういう感じになったんです。

だから儒教も最近ずいぶん変わってきました。けれど、つい少し前までだと儒教のお墓って（土葬して土を掘るお墓です）、あれでは女性の墓はないんです。男性のみ。それで女性のような不純なものは墓に入れないっていうんです。だから、中国や韓国は男女別姓なんです。韓国なんかで結婚しても（最近ちょっと法律は変わっているんですけども）もともとは男、女の別姓です。あれをフェミニストの人の一部は間違えて、韓国では昔から別姓ですって言っていますが、あの別姓は内容が違って、女性ごときを男性の席には入れないっていうことなんです。ですから金さんは結婚しても金さんで終わっている形だったわけです。それで墓もない。そのうちに、あんまりじゃないかって話になって、これも近年の話なんですけど、男性の方には立派な墓石があって、そこに、この人はこんな立派だったっていうのは刻んであるわけです。それで、その最後のところに女っていう文字が一文字入っていると奥さんを埋葬しているっていう、そういうことになったっていうのですね。奥さんの名前も何もない。ただ「女」っていう一文字です。最近の若い夫婦の中になると、もっと自分たちで勝手にいろいろやっているっていう感じになってきているんですけど、それぐらい強い男尊女卑の社会をつくっています。

だから、これは偽のお経なんですけど、江戸時代に中国から入ってきたお経で血盆経（けつぽんきょう）っていうお経があって（血のお盆って書くんですけど）、これがお経の中で一番短いお経なんです。とにかく2行ぐらいしかなくて、女は不浄だから、死んだら地獄に落

ちるって書いてただけなんです。けれど、これが本物のお経であるかのごとく広がって、日本では御札を売ることに悪用されたっていいます。つまり嫌だったら、この御札を買えばいいみたいな。そういう商売に使われたんです。ただ、それは後に中国で作った偽のお経っていうのがバレてしまいました。ただ、そういうお経を作らなければいけないぐらいの社会だったっていうのです。それでないと仏教が浸透できないっていう、そういうことだったんです。だから、江戸時代まではそういう武士、男性中心の家社会と庶民の労働共同体的な家社会っていう違う社会があったのです。

それが明治になりますと全員を武士化させようとした。それは結局、戦争に勝たなきゃいけないんで、戦争に勝っていこうとすると（今は結構、女性兵士もいますけど）、やっぱり戦争って男性中心の社会なんです。そうすると女性は銃後の方で、せいぜい物を作ってくれということになっていくわけです。だから結局はそういう戦争の時代が、もう一度男性中心の家社会を作り上げた。それを庶民にまで下ろしてしまっただけってことなんです。

僕はある時、明治になってできた文部省唱歌って見ていたんだけど、僕は文部省唱歌って基本的には嫌いなんです。なぜかという唱歌「ふるさと」を含めて故郷に暮らそうという歌が一曲もないんです。全てふるさとを捨てる歌なんです。それも子どもの時から。しかも、あそこには女性の歌がないんです。全部が男性なんです。だから、その故郷を捨てて都会へ出て行って、それで国家のために働ける人間になっていくっていう。それが産業界で働くか、軍人になるか、公務員になるか何でもいいんだけど、とにかく国家の役に立つ人間になっていくのが立身出世なんで、男子は立身出世を目指さねばならない。

それでふるさとは想うものになっていって、それで、いつの日にか帰らんとか言っています。けれどあれはその立身出世に成功して、それで成功の旗を持って帰ってくるのです。だから、その最後は故郷でも暮らそうって話じゃないわけですね。それで、あの詩を作った高野辰之（東京芸大の先生ですけど）、彼は晩年に長野県の豊田村（飯山の近くのむらなんですけど）に帰って、その時は駅から生家まで村の人が提灯行列で迎えたというのです。それで一週間いて、また東京に帰って行った。つまり成功者であることを示したのです。だから何であんなことをみんな喜んで歌うんだっていう気がするのです。

さらに言ってしまうと、あの歌ってうさぎ追いついの山って あれは何のためにうさぎを追ったか知っていますか。日本の場合、狩猟ってのは明治になって作った軍需産業なんです。明治になりますと、日露戦争のあたりから大変寒いところで戦争をすることになって、そのために毛皮が必要になったんです。毛皮って襟につける感じです。当時の軍隊の軍服って木綿なんで、普通の兵隊さんは木綿だから大変寒いわけです。そのために襟のところだけでもいいから毛皮をつけたいという。そのために各学校で競ってうさぎ狩りをやったんです。その時に軍部が農村に出向いて鉄砲の打ち方などを教えてですね、それで狩猟を軍需産業として育成したっていう。だから狩猟団体って（今でも名前を変えてなければ）、ちょっと前まで僕の知ってる人達って大日本猟友会っていう名前だったわけで、明治の名前そのまま。まさに大日本猟友会なんです。その時に子どもたちが学校で集団のうさぎ狩りをして、うさ

ぎを取って校舎の軒下にぶら下げ、これだけ取ったって誇らしい写真がいっぱいあるわけです。だから、うさぎ追いかの山ってのは牧歌的な歌じゃなくて、こうやって、みんなしてお国のために頑張っているっていう、我ら小学生まで頑張ってるっていう、その歌なわけです。それでいつの日にか帰らんは、その成功者として帰えるってくるという。それが男子の本懐であるっていう。だから、そこに女性は出てこないわけです。つまり、けしからん文部省唱歌を、なんで女性までが一緒になって、ウサギ追いかなんて歌っているのか僕としては信じられないという感じなんです。だから明治になってきて、そういう軍国日本を作ったりする過程で家制度も変わっていくし、いろんなものが変貌して行って、それでおかしくなっていた歴史なんです。

しかもそれが昭和になって昭和の戦争が始まっちゃうと、ますますその国家の一元管理の一角に共同体まで全部入ってくるっていう。そういうふうな制度改革が行われるわけです。だから今、私たちが共同体って呼んでいるのは、やっぱりあくまで江戸期の共同体に戻って考えるべきで、ちょっと前まであったものに残影はあると思うけど、それが、そっくり日本の伝統的共同体ではないのです。そのあたりを含めて検討のし直しをする時期に来ているような気がします。

Dさん（松川町）

Q=江戸期の共同体に戻らなくてはならないって、ちょっとイメージが湧かないんです。素朴な質問ですけどお願いします。

A=江戸期の共同体の柱にあった考え方っていうのは、やっぱり「恥」なんです。つまり恥をかかせてもいいけない。自分が恥をかくのも嫌なんだけど、特に他人に恥をかかせてはいけない。だから江戸の町なんかでも、長屋があって当然ながら人が住んでいますから、ちょっとした犯罪が起きるわけです。だけど表に出てくる犯罪が極めて少ないのです。なぜかって長屋の中で解決したんですね。だから犯罪が起きたっていうのを表に出すのは長屋の恥っていう考え方がある。だからなんとか納めちゃおうとします。その時には、例えば誰かのものを取った話があった時に、比較的余裕のある人がその人にとりあえず弁済したりします。それでその犯人に当たる人に、この後は真面目に働いていつか返せと言うことです。いろんなことをやりながら、要するに自分たちで解決して行って恥を表に出さないっていうのです。

そうすると、田舎では脱落者を出すっていうのは一番の恥なんです。だから村の共同体で脱落して常に村に居られなくなると、どこかに行ってしまうんです。それが、やもうえない本人の都合だって言うならしょうがないんです。けれど、そうじゃなくて村でやっていけなくなると脱落するっていうのは共同体の恥なんです。というのは、そこまで支えることができなかった共同体の持っている恥っていいですか……。だから、至るところに恥っていう感覚が入ってきて、その人にも恥をかかせないし、共同体としても恥をかかないという。そういうことを普通に人は常に考えていました。

今は自分が恥かくのはみんな嫌いなんだけど、人に恥かかせるのは平気になっちゃってで

すね。これじゃあ共同体になりようがないんです。むしろ共同体っていうのは、自分は恥をかいてもいいけど他人には恥は欠かせないっていう。むしろそういう感じになったはずですから、やっぱり自分中心の社会をつくった時代と共に生きるってことで、生きた時代の違いではないかと思います。

Q=それで 300 年続いたのですね。

A=そうです。

E さん（上伊那）

Q=今日のお話で最初のところで、生まれた村や町で完結する人生とはどういうことだろうかという問いかけをされたと思うんですけども、共同体と人の流動性っていうか、よそ者とそういう者との権利。共同体っていうのは、それも入れられる概念なのか。それは程度の問題なのか。それとも肯定的にちょっと違うのかというところを先生のお考えをお聞きしたいと思います。

A=それについては条件によってずいぶん違うんですね。というのは、例えば田んぼ中心の村があった場合、田んぼ中心の村っていうのは、昔で言うと一軒が一町歩ぐらいあると（1 ヘクタールですけど）、最低限何とか暮らしていけるみたいな社会です（今は 1 ヘクタールくらいではどうしようもないですけども）。そうすると仮に 1 ヘクタールで暮らしていけるとしても、その地域社会に 100 ヘクタールの水田があるとすると、暮らせるのは 100 軒なんです。それがもしも 200 軒になってしまえば、仮に均等割りにしちゃえば全員が 0.5 ヘクタールになっちゃって、全員がその地域ではやっていけなくなっちゃう。そうすると、この村の定足数は 100 人って決まっちゃうわけです。つまり農地面積からそれができてしまうということなんです。

もう一つ言えることは農地面積だけじゃなくて、利用できる水の水量でもあるわけです。というのは、昔は用水路を作って田んぼに水を引いてくると仮定すると、水が潤沢な地域と水がちょっと不足気味の地域があるわけです。だけどそうすると、この地域では何軒が何ヘクタールぐらいまではやっていけるけど、それを超えたら無理ですって言う、そういうことがあるわけです。

それからさらに、ここらでは関係ないんですけど越後平野っていうのは元々が沼地なんです。むしろ沼から水を抜いて田んぼにしたっていう、そういう感じなんです。だから森がないわけです。そうすると越後平野なんかでは薪が困るわけです。当時の燃料ってみんな薪ですから。そうすると薪の利用可能量からこの地域は何軒までってのは決まっちゃいます。昔は共有林の薪を取る山の管理が大変厳しい地域があって、だからそれもまた違ってきます。森がたくさんある地域では結構「適当でいいよ」っていう感じが出てくる。だけど木が足りない地域では非常に厳格な管理していかざるを得ないわけです。だから、そういうことによって定足数が決まってしまう地域があって、定足数が決まってくるとよそ者の排除もあるし、次男が残るのも困るという感じになっています。それは当時の条件から言うと「仕

方がない」っていう言い方もできるのです。

ところがそれに対して、例えば僕のいる上野村になってくると、まず村に田んぼが一枚もないんです。田んぼがないっていうことは水管理の必要性がない。だから水管理っていうと自分たちの生活用水の問題になっちゃうんです。それぐらいの水だったらば、やりようはいろいろと出てくる、そうすると田んぼの必要性もないし、水管理の必要性もないし、薪は腐るほどあるって言う……そういう感じになっちゃうわけです。

そうすると外から入ってくるのも全然嫌がらない、外から入ってくる人が工夫をして住んでくれるんだったら、その工夫の中に新しい技術があるんで、かえってプラスになる場合もあるわけです。そう考えているからここに住みたいです、どうぞ、そういう雰囲気は昔から作っているんです。それがあるから、今人口のだいたい4分の1ぐらいが移住者っていう村になっているんです。だからこういうのを見ていると、田んぼがないのもいい事っていう感じがしてくるんだけど、そういういろんな条件によって変わってきています。

今はその水管理なんかもかなり潤沢にできるし、田んぼも余っている時代になってきているし。薪がないと暮らせないという時代でもなくなっている。だから、そういう時代にあった、その地域の考え方って言いますか……だからもう定足数がなくなったっていう感じがするし、それから外から人が入ってきても、全然問題はないということです。そういう時代にあったものを作っていかなきゃいけないということです。

だから元々、流動性は根拠があってそういうことになっているだけであって、その根拠が今なくなってるわけだから、それはもう抜本的に変えなければいけないと思います。

Fさん（岩手県）

たまたま岩手から長野県へ来て、いろいろな地域を回っています。

先生のお話を聞きながら、実は岩手県の方でも学生を連れて関係者のところへ出たりしているのですが、今日は非常に落ちるところもあったんです。けれども、まず一番聞きたいと思っているのは共同体ということで、生きている人間だけではなくて自然、それから先祖、これまで先生も書かれてこられた神仏。そういう形で考えた時に信仰の共有っていうのが共同体の中でやっぱり必要になってくる。これも非常に腑に落ちます。

ただこれを、テーマとなっている江戸期の共同体で考える時に、その段階で疑問というかお聞きしたいのが、江戸期の共同体はこういうふうにイメージした時に、生きている人と死っている、生と死があるんですけども、そこはあんまり厳密に考えていないというのが感じられます。現代人は死をすごく恐れますけれど、それがあるから現在で言えば命を守らなくてはならない。これは高い価値として人間の尊厳というのを考えているところがあると思うんです。けれども、こういう江戸期の共同体のイメージというのが非常に緩くなるというか、関係の中でずっと時間の中で流れてくるんだからっていう形でこれからの将来を考えた時に、この命の問題はどう考えたらいいいのかなっていうのが一つです。

もう一個あるんですけども、共同体を見直していった時に、共同体が仮想的にあるという

のは先生の考えと思うんですけども、日本とかグローバルっていう外の問題に対して外と内側に出てきた時に、内側のメンバーを守るっていうことについて、どこまで有効というか可能なのかなというのがあります。

特に近代化していく過程では、そういう問題っていうのは徐々に問題が出てくると思うんです。これからの揺り直してことを考えた時に、それこそ今日出てきたワクチン、レフリコンの話もいろいろと言われています。けども、いろいろ懸念されることが出てきていたり、あるいは食や水の問題であるとか、そういうものが従来通りにいなくなってきたとき、そこに人がいるから、こう降りてきてるわけです。どこの地域でも、それぞれ押しなべて降ってくる問題に対して、もちろん日本の政治というレベルでやらなきゃいけないっていう仕組みがあります。けども共同体としてそれは関係ない話ではすまなくて、ちょっと命っていう問題で考えた時には、見送ってはいけない時と思ってきているのですが、こういう問題にどのように向き合っていけばいいかな……というのはすごく大きな疑問で危険なのかなということでもよろしく願いいたします。

A=さっきちょっと言った、日本で言えば 400 年代から 500 年代ぐらい、仏教が伝来した時代とも言えるし、豪族が奈良に権力を作った時代っていうふうに言ってもいいのです。そういう時代に日本にはたくさんの渡来人が来ているわけです。どうも平安時代にできた渡来人の姓の名字の本によると、中国系の苗字が一番多かったみたいなんです。だけど百済や新羅から来た人も大変多かった。その人たちが 100 年とか 200 年とかかかっていくんですけど、日本の社会の中にどんどん融合していっちゃうわけです。

それであつという間にむしろ日本の人間として活躍をしていく。それで渡来人の流れを汲む人は、仮に、渡来人は日本人ではないですよって話にした場合、そしたら空海も渡来人ですし（渡来人の末裔っていう性格ですけど）、あの頃の仏教者ってほとんどみんな渡来人の末裔っていられています。それで修験道を作ったって言われる役行者も（これは庶民的渡来人っていうか高級渡来人ではない、空海なんか高級渡来人です）末端の渡来人、それも末裔みたいです。だから、渡来人を排除しちゃったら、日本の社会が成り立たないじゃないっていうぐらい、渡来人だらけの社会を作ったわけです。だから、ここに今日来ている人の中にも、ちゃんと調べたら、先祖はどっかの渡来人になっているっていう人もいるかもしれないんです。ただ、もうそのことは何も意識しなくてもいいぐらい普通になっちゃっているんです。そういうような時に時代的に激変をしながら日本の社会を作り上げるっていう、そういう時代もあった。だけど、それを作り上げたのは権力側ではなくて民衆の側であった。民衆と一緒に暮らしていくことだったわけです。

だから僕の上野村から谷を一つ越えていくと秩父になるのですが、秩父は和同開珎の頃、渡来人が来て銅を掘っていたんです。だからあそこに銅が出るとわかったんで、渡来人にあそこに行って、掘ってくれて言ったのは朝廷の方というか権力の方です。けれど今でも中部地域には、渡来人がルーツなんじゃないのというような感じの苗字を持ってる人って結構いるんです。だけど 1500 年経っていますからただの土地の人っていう感じです。

そういう形の形成もしていった。だから結局そこに本当に土着化していく過程では、その民衆のつながりの中に入っていた。もしかすると民衆のつながりの中に入っていくことができなくて、そこに土着化できなくて、また去っていった渡来人というのがいたかもしれない。だけど、そういう歴史を含めて我々も社会を作ってきた。今また渡来人って言うかどうかは別にして、いろいろな人が入ってきている。結局、その中からも日本的な文化のつながりとか、そういうものの中にどんどん入っていく人もいるでしょうし、入っていくことができない人も出てくるでしょう。そういうことを経ながら行くということなんですよ、という気がするのです。

そこで、ある時にエバレット・ブラウンと言われる写真家が居て、彼はアメリカ人で日本のいろんな写真を撮ったりしている人でもあるんです。千葉に農場を持っていて、そこで日本の若い連中に有機農業を教えていました。それで日本の若い連中がアメリカ人から有機農業を教わるっていう時代だという気がするんだけど……、彼によれば日本の有機農業ってのは世界最強の農業だ、それを日本が台無しにしていくっていうのは我慢ならん。それで日本の伝統的有機農業を教える農場を千葉につくったのです(今どうなっているかわかりませんが、数年前は間違いなくやっていました)。

彼に会ったのは、ある雑誌の企画で対談してくれというのでした。そうしたら、彼が長野県から帰ってきたと言ったので、長野に何しに行ったのって聞いたら、戸隠神社に行ってきたそうです。戸隠神社は、元々は修験道系の神仏習合の場所なんで、少しそういうことを考えると、今回の行事は法螺貝を吹き鳴らしながらやりたい。ところが戸隠神社に法螺貝を吹ける人がいないんで、なんとエバレット・ブラウンに法螺貝をたのむって言うのです。それでエバレット・ブラウンは自分の知り合いの法螺貝が吹ける外国人ばかりを10人ぐらいを連れて、10人くらいで法螺貝を吹いて帰ってきました。それは戸隠神社も情けないなって話になった。だからそういう外国人も出てくるわけです。

だから外国人っていう人たちも、例えばコロナワクチンが日本に押し寄せてくるとか、そういう形のものと人間が入ってくるものといろんなものが、今そのところは入り口で止めるとかいう時代じゃなくなっているんで、今そういうことも経ながら社会の作り直しみたいなものにいくという時期であって、ただ、そういう中で日本の伝統的なものっていうのがびっくりするぐらい評価されている。日本に土着化していこうとする人たちには評価されているという、そういう時代だという気がしています。

だから歴史の中ではそういう変動が起きている時期と江戸期のようにある意味では安定していく時期があり、いろんな時期があるんでしょって気がするんです。だけど、そういうこともまた我々の側が乗り越えなきゃいけない。だから、我々の側が土着出来るような仕組みを作っていく。そういう意味で我々の側が乗り越えなくてはいけない気がするのです。

もう一つの生とか死の話なんだけど、やっぱり明治になって変わってしまった大きなものの一つに、ご先祖様っていう言葉の意味があるんです。ご先祖様っていうのは、それまではその社会をつくってくれた先輩たちがみんなご先祖様なんです。だから村では村のご先祖な

んです。村を作ってくれた。だから、それは初めて村に住み着いた人を含めて、その後ず〜っといろんな人たちが頑張って村を作ってきたという村人たち、それをご先祖様と呼んでいる。

だから 職人たちにとってみれば、例えばさっきの鍛冶屋で言えば、鍛冶屋の技術を作った人っていうのはご先祖様だし、その鍛冶屋の技術を伝承してきた人たちもご先祖様。だからお坊さんからするとお釈迦様ってご先祖様なんです。それであの人がいなかったら、そもそも坊主の世界は始まんないわけです。それと同時にお釈迦さんの教えを正確に伝えたかどうかはともかくとして、ず〜っと伝承してきた坊さんとかそういう人たちの世界があるわけです。それから、そのお坊さんだけでなく、その仏教的世界を守ってきた庶民の世界があるわけです。そういうことがあるから、今私は坊さんとして活動できる。そうするとお釈迦さんから言えば、檀家さんの世界から全てご先祖さんなんです。そういうご先祖様だったのに明治になってくると、我が家のご先祖様だけがご先祖様。つまり、これが明治の家制度を作るのと絡んでいるわけです。

だから柳田国男でさえ、ご先祖様に固有名詞がついたのは最近のことだって書いているのです。つまり明治になってくると、ご先祖様がうちの太郎兵衛さんになったりするようになっちゃって、そのことによって今度はみんなが家計図を欲しがる時代になってきました。それで家系図っていうのは一部の武士には正しい家系図があるんでしょうけど、一般庶民が持っている家系図は 100% 偽物だと思って構わないのです。それは明治以降にみんながでっち上げたんですね。家系図がないと肩身が狭いという感じになって。

実は僕の母はもう亡くなっているんですけど、祖父がいろんな転勤する仕事をしていたこともあって、いろんな地域に住んでいる時がありました。ある時、愛知県の豊橋に住んでいた時があるらしい。そしたら奥に豊川稲荷というのがあるので、ちょうど 10 代前半ぐらいに豊川稲荷のお祭りが楽しみで楽しみで、多分大きなお祭りだったんでしょう。その縁日にずらっと並んでいる店、それで一番多かったのが家計図売りだったそうです。それは昭和 10 年代前半ぐらいの話なんですけど、もう昭和の戦争体制に入りかかっているんで、家系図がないのはますます肩身が狭い。値段によって出だしが違うのです。いくらの家系図にするか、私は 1 万円のにしますって、じゃあここだなんていう。それで最後の 3 人分ぐらいが空白になっていて、おじいさんの名前わかりますかって書いてゆく。じいさんは昔亡くなっちゃったんで、ちょっとわかんないんですけどと言ったら、じゃあ彦左衛門にしておきましょう。それで家系図を買っていく。それをたくさんの人たちが買っていた。そうやって家系図ができて、それで、そこに家のご先祖様が発生したって言っていました。

だから、今でも僕の村の盆踊りになると……盆踊りってのはご先祖様が帰ってきて、それでご先祖様を楽しませるために盆踊りをして、最後にじゃあ達者でなって見送るという感じになるんだけど、山に見送る時には村のご先祖様として、みんなが集まって一緒に送るといいう。ちょうど京都の大文字焼きに似たことをやるんです、山に火をあげて。だからそれが正式なんですね。自分の家で密かに（やる人も少なくなりましたけど）、ナスやキュウリで自

分の家だけでやっては、本当はいけないんですね。

だから、こういうご先祖様感も明治になってからです。だから私たちの世界とその広大なご先祖様の世界があって、私たちはここに生きているっていう、そういう感覚なわけです。そうすると死んだ後も、死後の世界の案内じゃなくて、その広大な世界を見ているからその世界に行くだけなんです。

今はそのご先祖様の世界がなくなっちゃったし、祖先が一体どこに行ったらいいのかもわからない。とりあえず墓だけは確保しておこうなんて話になったりしたけど、墓を確保しても骨を入れとく場所を確保しただけで、魂が行く場所じゃないから困っちゃったわけです。けど、それは個人の魂が行くのではなくて死後には先祖様という大きな世界が待っていて、そこに私たちは行くんだっていう、そういう死生観だったということです。

Gさん（伊那市）

Q=先生のお話を聞いて、日本的な伝統的社会感そして共同体が残っているのは農村社会ではなくてどちらかと言うと会社。同じような職域を持った人たちが集まって、同じような文化的背景、年齢層が集まった会社の方が、こういう伝統的な社会観が残っているような気がします。

ただ、実際あの会社のラインの中身を見ると、こういうのは伝統的な精神的なつながりだとかはなかなか生まれていないような気がしています。都会で会社があれば人は幸せになると思うんですが、そうではない。そこに対して先生の農村に希望があるというように感じるのはどういうことなのかお聞きできたらと思います。

A=会社は一面では共同体的な面も持つけれど、やっぱりインチキ共同体なんですね。なぜかって言ったら、あれは利益共同体にすぎない。だからみんなして利益を出していくっていう、そういう共同体にすぎないのです。

本物の共同体っていうのは利益が出ようが出まいが助け合っていく。さらに言っちゃえば、最後はさっき言った大きなご先祖の世界にみんな入ってゆく。そういうとこまで含めて共同体なわけです。そうすると会社はそこまで面倒見るかって言えば見ない。それどころか経済的価値を生まなくなると、はい、君「辞めてね」みたいな世界に行っちゃうわけです。

だから、もともとは定年だって年齢で切るって言うわけじゃなくて、もうそれだけの経済価値を生まなくなった。それが昔だったら60歳ぐらいで。最近はどうちょっと働いてもらおうって話になっているけど、あくまでそれは経済的価値を生む人間と生まない人間っていう、やっぱそこで線引きされちゃうってことです。だからやっぱり会社っていうのは、一見共同体的な面を持っているかに見えて、実は全然違う。だから、そこで働いている人たちに自然葬的なものが流行り始めて、それで死んだらば骨を山の中に蒔いてもらいたいとか言う人たちが登場してきた。それは、もうそれぞれの考え方で良いと思うんです。海に蒔いてもいいし、山に蒔いても（違反なんだけど黙認していますから）いいんじゃないですかって感じがする。

だけど、あれほど高度成長期の日本は会社人間と言われる人をつくって、会社のためにつくして会社と自分が一心同体になっているような人を作ったんだけど、死んだら骨を会社に蒔いてもらいたいって人はいないんです。あれが本当の共同体だったら死んでも会社から離れたくないような……。私の骨は何とか会社をお願いして、会社の玄関の裏にでも、まいてくれって言う人がやっぱりいない。まいてもらいたいっていうと森の中に蒔いて欲しいとか、人によって海に蒔いてほしいとなっていくっていうことになります。

やっぱりこれは本当の共同体じゃなかったんだなって気がする。だから、本当の共同体だったのなら、ここで死ぬんだったらそれは受け入れられる。そういう感じがあってこそ共同体っていい。だから家族は小さい共同体って言ったのは、家族の関係がうまくいっていると、亡くなる時にこの家族に送ってもらうんだったら、もう私十分です。何も言うことありませんとの気持ちになることができる。これが共同体なわけです。

残念ながら会社で部長が来てくれたら満足して死ねますっていう話がないわけですね。だから、やっぱり、あれはインチキ共同体なんです。

(司会)

ありがとうございました。それではそろそろお時間になりましたので、これで閉めたいと思います。(拍手)